

近世前期の書流と江戸版の版下

― 近世前期江戸出版界における〈江戸〉意識の萌芽(2) ―

母 利 司 朗

はじめに

写本か版本かを問わず、物としての本の印象を左右する大きな要素に、版下文字の書風がある。近世前期のかぎられた時期に江戸で出版されたいわゆる「江戸版」について言われてきた、たとえば「独特の版下文字」(橋口侯之介「古本屋の仕事場」⁸ 和本の紙を調べる)¹ という言い方もそのあらわれである。

江戸版については、柏崎順子氏が、江戸の各書肆の動向、版下の書風や挿絵など、多方面にわたり、詳細な研究を精力的に積み重ねておられる。²

筆者もまた、「近世前期江戸版の本文版下」という論文(以下「前稿」)の中で、紙面の文字数や字詰といった江戸版の版下本文の全体的な特徴をあげるとともに、一つ一つの文字についても、「上方版の線を、一画一画抑揚を強調し、「はね」「はらい」「おれ」といった運筆を大きく、時には過剰といつてよいほどに表現し」ている点を具体的な特徴として指摘したことがある。

しかしその一方で、江戸の書家隠岐置散子という御家流(尊純流)

の書家の書風に注目し、一見「独特」に見える江戸版の版下文字の書風が、当時の標準的な書流であった御家流の書風の範囲内におさまるものであったのではないか、という可能性についても言及した。江戸版の版下文字の書風が一見「独特」に見えるのは、その書流の範囲内での個性の違い程度のもので、現代のわれわれが「独特」と感じているにすぎないのではないかと考えたためである。

今あらためて考えてみても、同じ時代の出版物に書かれた版下の文字の書き方が、上方の出版物と江戸の出版物の間でまったく異なったり、無縁であるはずはない。版下の文字を書いた筆工は、その出自や経歴こそ異なれ、上方においても江戸においても、当時既存の書流のいずれかを学んだ者たちにほかならず、その代表がいわゆる御家流と呼ばれる流派だったのである。

ただ、江戸版の版下の書風については、前稿執筆時に考慮に入れていなかった別の書流を視野に入れる必要があることに最近気づいた。弘法大師の書風にその淵源を求めるといふ、室町末にはじまった大師流と言われる流派の書風である。

大師流とは、現行の辞典類に、

空海の書風を誇張した特色ある書風。

〔ブリタニカ国際大百科事典〕

空海の書風を受け継ぐ流派。中世末、空海の装飾的な書風を、さらに誇張して創始された。大師様。〔大辞林〕 第三版）
などと簡潔に説明される書流であり、またその書風をいう。
前稿においては、江戸版の版下本文の書風から受ける「独特」の意味を御家流の個性の範囲内のものとして理解しようとしたのにたいし、本稿では、その時点では考慮しなかつた大師流という書流の書風をとりあげ、それと江戸版版下本文の書風との関係を考えようとするものである。なお、行文の都合上、前稿と、内容や文章の重なりが似通うところのあることをお許しいただきたい。

一 江戸時代の書流・書風はどう感じられていたか

江戸時代前期の書流については、小松茂美『日本書流全史』（講談社・一九七〇年）他、書道史を記す書籍の中ですでに様々に説かれている。しかしその多くは、人物や伝書中心の伝系・系譜を記したものであり、江戸時代、それぞれの書流や書風が、人々の感覚の中でどのように受け取られていたのか、どのように感じられていたのか、という点については、まったく触れられないことがない。

江戸版にたいする「独特の版下文字」という言い方の「独特」の意味を検討するにあたり、もつとも手っ取り早くかつ効果的なのは、江戸版の版下文字の書風が、当時行われていた様々な書流のどれに近い

書風であるかを調べてみることであろう。もしそれが、当時、標準的な書風とくらべて風変わりなものと受け止められていたならば、そこではじめて「独特の版下文字」という言い方も生きてくることになる。
さいわなことに、江戸版の出版された近世前期に流行していた俳諧の中には、当時の書流の名称やその書風についての様々な詠まれ方を見いだすことができる。これらから、当時の人々の、書流や書風にたいしての感覚、受け取り方をうかがうことができるはずである。
さっそくそれらを一一つながめてみよう。

【御家流】

御家流は、『日本国語大辞典（第二版）』の「語誌」に、

徳川家康が奨励し、祐筆の建部伝内が幕府の公的文書に用い、大橋重政が実用性・通俗性を増した。崩し方が平易であり、江戸幕府も使用を強制したため、寺子屋でも書道の手本となり、実用書体として全国の武家、町人、百姓、婦女子へと普及し、その影響は明治時代にも残った。

と説明される。十七世紀の俳諧には、

書初もめでたや殿の御家流

桑折氏頼邑

〔大海集〕 寛文十二（一六七二）年刊

書初や都の手ぶりお家やう

直満

〔曼殊院蔵『俳諧三ツ物揃』 延宝三（一六七五）年刊

仰られ分御家風なら月影も

梅翁

祐筆がきく小男鹿の声

定俊

〔難波風〕「何桶」 延宝六（一六七八）年刊

などと詠まれ、江戸時代の武家を中心としたもつとも標準的な書流であることがうかがえる。

その広い意味での「御家流」をになった書流にはいくつかのものがあり、

書初をするや長生殿内やう

正世

〔へちま草〕 寛文元（一六七二）年刊

という伝内流、そして

渡る也大橋やうに雁の声

幽山

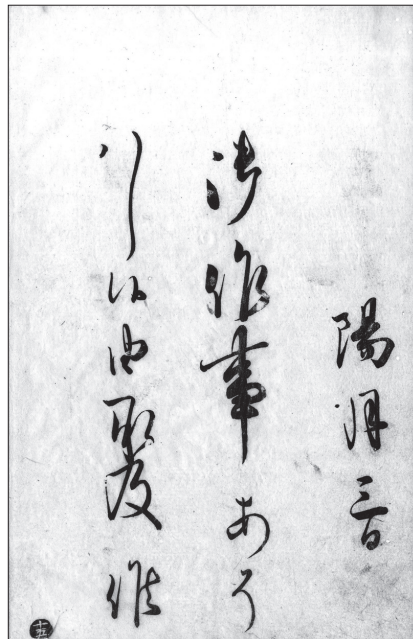
〔俳諧坂東太郎〕 延宝七（一六八九）年刊

にいう大橋流が俳諧に詠み込まれている。

後者の句は、雁のまっすぐ棒のように連なり飛ぶ様を、大橋流の特徴である、遊びの少ない直線的な文字の書き方（図1）に見立てた詠み方で、その特徴を巧みにとらえている。

同じ幕府の祐筆家の書風としてありながら、その特徴をやや異にす

図1 「大橋書用」宝曆九年刊 小泉吉永氏蔵



るものにとらえられていたのが、松花堂昭乗にはじまる次の滝本流である。

滝本流は、伝内流、大橋流ともども、江戸時代を通して多くの手本が出版されており、その広がり方には顕著なものがある。また、現代人の感覚からすれば、その特徴は「温和な書風、端正・典雅の字形の和様の書」（吉川弘文館『国史大辞典』）とされる。

ところが、次のような俳諧における詠まれ方を見てみると、伝内流や大橋流とはかなり異なった感覚で受け取られていたのではないかと思われるふしがある。

【滝本流】

短冊や梢の花の瀧もと流

大坂 良賢

〔糸屑集〕 延宝三（一六七五）年刊

落かかる滝本坊にしかられて

西山梅翁

定家このかた毛虫わく也

〔物種集〕 同六（一六七八）年刊

岩をくゞつてのたくつて行

朝

咲は花滝本やうを書崩し

鶴

〔江戸大坂通し馬〕「江戸の様子」 同八（一六八〇）年刊

よる長に滝本流や女郎花

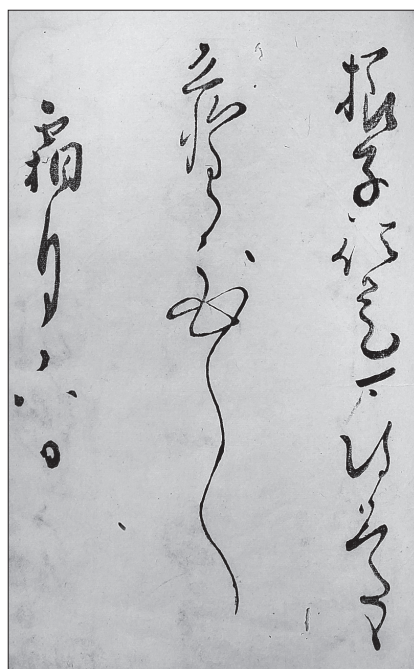
孟遠

〔正風彦根体〕第四 正徳二（一七一二）年序刊

『物種集』の「定家このかた」は、その書風が定家風に似通うことを示している。また、『江戸大坂通し馬』の「のたくつて」(図2)、『正風彦根体』の「よる長(による長)」は、滝本流の書風から受ける印象を、平易な俗語を用いてわかりやすく表現したものである。これらの言葉から受ける印象は、「温和な書風、端正・典雅の字形の和様の書」というのとはかなり異なったものであるはずである。

この滝本流の祖である昭乗の書流については、

図2 『式部卿消息』宝永四年刊



大師流の書をよくし、本阿弥光悦、近衛信尹とともに「寛永の三筆」の一人に数えられ、その書流は「滝本流」の名で江戸期を通じて長く流行した。 (小学館『日本大百科全書』)

書は青蓮院流・大師流を学び、上代の書風を能くし松花堂流(滝本流)の開祖となった。 (国史大辞典)

室町時代より主流としての流儀は、持明院流や尊円流があったがこの尊円流から松花堂昭乗があらわれた。彼は空海に心酔してその書法や書風を消化し自身の書を作りあげ、松花堂流と呼ばれていた。

(楠見俊雄「弘法大師の書流——大師流について——」『密教文化』第百四十九号・一九八五年)

と、その源の一つに大師流のあったことをいう指摘がある。

〔『誹諧晴小袖』 寛文十二（一六七二）年ころ刊〕

以上の幕府祐筆系の書流の書風にたいして、次の書流は、広義の御家流の書風から離れた個性的な書風を特徴とし、江戸時代前期にとりわけ流行した。

莊周が後出る宗鑑 朝

書れたり唐やうかと思へば格別に 蠅

〔『江戸大坂通し馬』「涼風や」 延宝八（一六八〇）年刊〕

【近衛流】

公家衆の好む古書や近衛流 桑折氏頼邑

〔『大海集』 寛文十二（一六七二）年刊〕

震えたような書き方を特徴とする宗鑑流については、現代、「奔放」

「大胆」「独特」という言葉で説明されることが多いが、「大師流習練

の果てに到達した宗鑑流ともいえるべき書法」〔山崎宗鑑筆一行書〕解

説・センチュリー財団〔C〕と言われるように、その書流の源は「唐

やう（唐様）」の大師流にあった。また、

ちんだやうな道のべの露

菘近衛様ふうの声たて、

宗鑑流の順礼の札 六

〔『仙台大矢数』中・十六 延宝七（一六七九）年刊〕

殊勝也三十三社の御託宣 七

〔小西甚一紹介『延宝四年宗因一座俳諧』「冬咲や」〕

「近衛様ふう」とは、いうまでもなく、寛永の三筆の一人近衛信尹の書風をいう。後者の付合では、その書風の印象を、さきほどの滝本流についての「のたくつた」同様、「ちんだやう」という平易な言葉で言い立てている。

二 唐様として的大師流の書風

【宗鑑流】

誹諧や宗鑑やうの筆始 土岐氏一癖子近之

さて、右に見てきた様々な書流のうち、かなり特徴のある書風とし

て受け取られてきた宗鑑流と滝本流については、その源の一つに、

大師流と言われる書流があげられている。

先に現行の辞典類に見たように、「空海の装飾的な書風を、さらに誇張し」たのが大師流の特徴であるというが、この大師流の特徴を語るさいにうってつけの資料がある。

いまだ嫁せざるはいと細やかに眉に墨を引きなれば、遠山の峯に三ヶ月の差し出たるが如くなり。此眉墨にさまざまあり。細きあり、太きあり、直なるあり、又は大師流の八文字、鳥山流の一字を書たるもあり。(『都風俗鑑』卷二 天和元(一六八一)年刊)
ここでいう「八文字」は、隸書の「八分字」「八分」のことで、女性性の端が跳ね上げるように引かれていることを隸書の「八分字」に見立てているのであろう。

言うまでもなく、「八分字」は、

茅が軒端八分字に春を忘るなど

友

しらぬは人の漢土に帰りて

翁

(『山の端千句』五 延宝八(一六八〇)年刊)

と、「漢土」、書風でいえば唐様とむすびつく。大師流の書風は、当時の人たちにとっての唐様の代表だったのであろう。

大師流を詠み込んだ句は、

虚空海こくうかいにかける雁字や大師やう

堺真光寺以專

(『口真似草』明暦二(一六五六)年刊)

替らぬやいにしへよりも今の京 高(道高)

大師やうにもかくいろは仮名 我(友我)

女さへ秘置法をそと聞て 舟(維舟)

(『時勢粧』第五 寛文十二(一六七二)年刊)

吉書もや秘蜜の始大師やう 境 頼広

(『歳旦発句集』承応三年条 延宝二(一六七四)年刊)

五輪九字さはぐ金沢の露

初塩を万里になぐる大師流

千年ちかうの萩の上風

(『仙台大矢数』第一 延宝七(一六七九)年刊)

といくつも見つかるが、多くは、(弘法) 大師と真言密教をむすびつけた詠み方であり、当時の人が書流としての大師流をどう感じ取っていたのかは、残念ながらうかがえない。

しかし、大師流を含めた唐様については、当時の人々の感覚、受け取り方を示す次のような例が見いだされる。

からやうの船をし池にうかべさせ 圃(立圃)

詩作ことなる文字の筆勢 孝(方孝)

(『巳巳巳千句』寛文八(一六六八)年刊か)

かくちわぶみを見るにからやう

くどくともいかでがてんの参るべき

〔備後表〕第八 同十二（一六七二）年刊

から様やこびた和朝の筆はじめ 岳本素看

〔俳諧三部抄〕 延宝五（一六七七）年刊

恋てふものは誰に手ならひ 翁

唐やうはちんふんりんのふり心 春

〔宗因七百韻〕同年刊か

先からやうにべろべろの声

よめかぬる詩酒五六盃たべ過て

〔山水十百韻〕 同七（一六七九）年刊

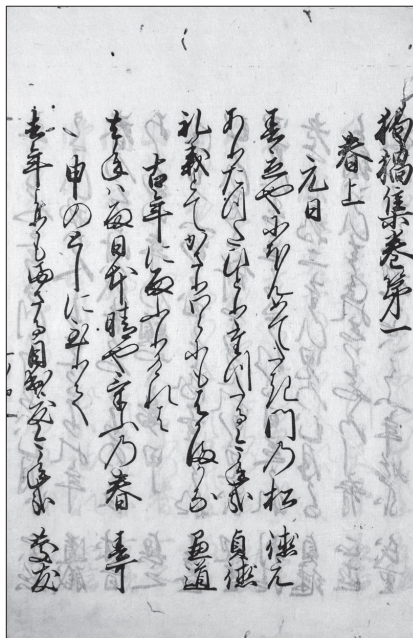
唐様は、「いかでがてんの参るべき」「ちんふんりん」「よめかぬる」「ことなる文字の筆勢」の言葉通り、人々にとつて、奇異な、なんともつかみがたい書風であり、こましゃくれたというほどの意味の「こびた」と感じられるような書風でもあった。唐様（隷書だけではなく、おそらくは大師流も含めての唐様）にたいするこのような言葉は、目慣れた標準的な書風から大きく離れた書風にたいしての違和感から来た言葉であるに違いない。

三 版下文字としての大師流

そのような中で、版本の版下に大師流が用いられたためずらしい例として従来指摘されているものに、江戸時代最初に出版された俳諧撰集『犬子集』の版下（図3）があげられる。『日本古典俳文学大系 貞門俳諧集一』の解説では、「その初版本は堂々たる大本五冊、板下も大師流の立派なもの」と記され、その書風を大師流とみている。

俳諧の中での書風といえば、松永貞徳の筆跡にいくつかの種類のあることについて、拙稿「貞室」の誕生⁵⁾で触れる機会があったが、貞徳の残した筆跡の中には、右の『犬子集』の解説が大師流と呼ぶよ

図3 京都府立京都学・歴史館蔵



うなものも伝存する(図4)。このような筆跡をもし大師流と呼んでよいならば、『大子集』の版下文字の書風はたしかに大師流である。しかし、貞徳の筆跡の中には、図4のような書風とはやや異なった、さらに装飾的な書風でかかれたものも伝存する。図5・図6・図7である。

図4

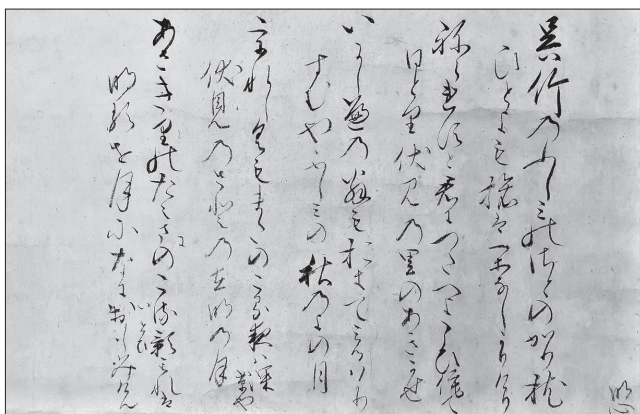


図5

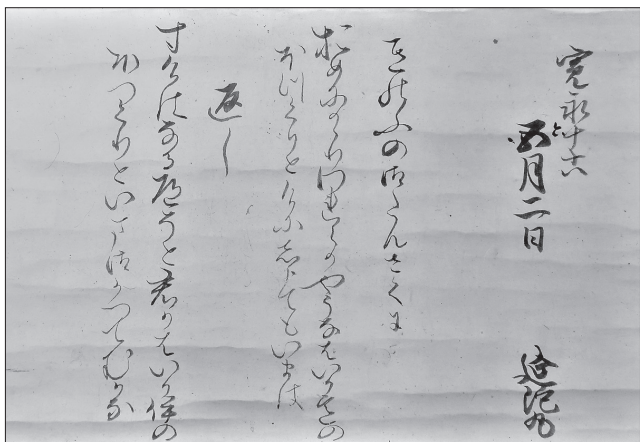


図6 「瓜硯の記草稿」 柿衛文庫蔵

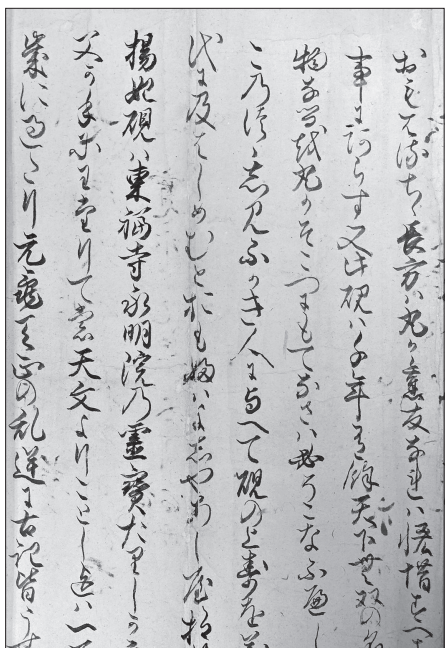


図7

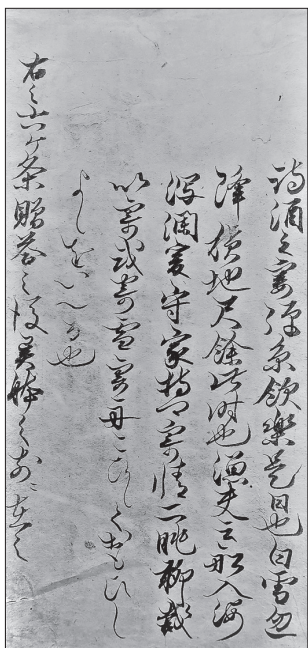


図5は、早稲田大学古典籍総合データベースにおさめられる「鳳凰も出よ長閑き酉の年 長頭丸」という貞徳の有名な短冊の書風にたいへん似通った書風で書かれている。右の短冊については、早稲田大学古典籍総合データベース「俳諧の世界」の解説に、

句意は、西年の新年に天下泰平の象徴である鳳凰も出てきてほしい、というところであろう。当時流行した大師流の書体で書かれている。

と記されているので、この解説にしたがえば、図5のような書き方も大師流の書風ということになる。

しかし、同じ大師流と言いながら、図3・図4の書風と図5・図6・図7の書風の間にはかなり大きな違いがあるように、私には思える。本来大師流と呼ばれる書風は、後者のような、肥瘦、抑揚に富んだ、多分に装飾的な書風こそをさすものだったのではないだろうか。その意味で、『犬子集』の版下文字の書風を大師流とする従来の見方には疑問を感じざるをえない。

四 大師流と江戸版

ここからは、図5・図6・図7のような書風を目に焼き付けた上で、江戸版の中でもかなり特徴的な版下の書風をもつ次のような版下文字をながめてみよう(図8・図9)。印象のレベルの物言いではないが、これらの版下文字は、デフォルメされ、うねくった、抑揚のある書風という点で右の貞徳の筆跡の書風と同類と見えないであろうか。

この大師流の文字の特徴と共通するデフォルメされた書体を版下の

図8 『実語教』延宝六年山本九左衛門版

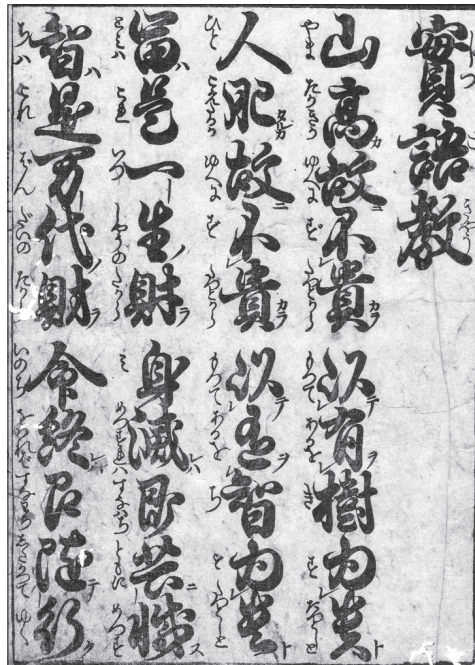
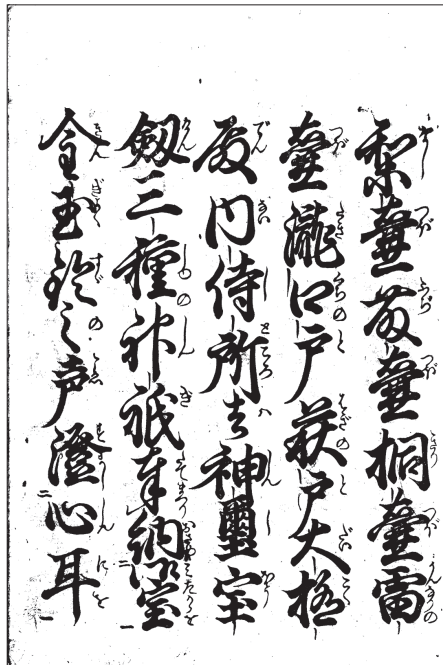


図9 『都名所往来』延宝三年松会版



文字に用いていたのが、上方の浄瑠璃本屋の出版物なのである(図10)。

図版にかかっていたのは、浄瑠璃本の版下の中でも、文字の書き方の特徴がはっきりとしやすい、表紙に貼られた題簽である。デフォルメされた大師流の書風は、上方の出版物においては、浄瑠璃本、あるいは浄瑠璃本をあつかう本屋で出版された本にほとんど専用的に用いられていた書風であったが、江戸においては、浄瑠璃本の枠をこえて広く採用されることとなった。一般には見慣れない標準的な書風でない版下文字は、おそらく当時においても、本の版下の書風としては違和感をもって受け止められたことであろう。この特異な書風を、意識的に採用し、多用したのが、江戸の出版物であった、ということである。江戸の出版物が、上方にたいしての〈江戸〉を意識した一つの時代がここにはじまったのである。

江戸版についての近年の研究成果の大半をになわれた柏崎順子氏

図10 『あみだが池新寺町』題簽 元禄十二年
八文字屋八左衛門版 国立国会図書館蔵



は、「江戸版考 其二」⁶⁾という論文で、

所謂江戸版の文字の流儀も厳密に言えば何種類かに分類できるが、版下の筆耕を個人の資格で多くの人間が担当していたとは思えない。そこで思い合わされるのが師宣風の挿絵の問題である。師宣風の挿絵は師宣個人の仕事ではなく、師宣工房のようなものが存在していて、複数の板木下絵師によって挿絵が制作されていたという説である。挿絵制作の工程が特定の工房に委ねられていたとすれば、版下の筆耕も特定の流派の子弟仲間に委ねられていた可能性が高い。

という指摘をされていた。

前稿においては、繰り返し言うように、江戸版の一見「独特」に見える版下文字の特徴を、御家流の範囲内の個性、というふうに加え、柏崎氏の指摘のように考える必要を必ずしも認めなかったのであるが、今回、当時もとても異風に受け取られていた唐様、中でも大師流という流派の書風の存在に気づくことによって、江戸版の書風の奇異さをかもしだしたのは、この大師流という「特定の流派」だった可能性があるのではないかと考え直した次第である。

注

- (1) <http://www.mnjp.or.jp/seishindo/essay/index.html>
- (2) 『江戸版考』『一橋論叢』(第百三十四卷第四号・二〇〇五年)他多数。
- (3) 『京都府立大学学術報告 人文』第六十四号・二〇一四年。
- (4) 以上の書流の他、

年の名の鳥かいやうや筆はじめ 泰春

『蛙井集』寛文十一（一六七二）年刊

かきてしるとりかひよのいろは哉 令富

『如意宝珠』延宝二（一六七四）年刊

にいう鳥飼流、

赤恥を書簡の脇にか、せたり 朝

曾我流におそれ大藤内は 蠅

『江戸大坂通し馬』世に高し 延宝八（一六八〇）年刊

にいう曾我流を詠み込んだ句例が見られるが、当時の人々がそれから書風にいただいた感覚というほどのものは読み取れない。

(5) 『東海近世』第二十七号・二〇一九年。

(6) 『人文・自然研究』第一号・二〇〇七年。

付記

本稿は、JSPS 補助金（課題番号 18K00321）による研究成果の一部である。図版のうち所蔵者名を記していないものは母利蔵本である。写真掲載を許可された所蔵機関にあつくお礼申しあげる。

（二〇二〇年十月一日受理）

（もり しろろ 文学部和食文化学科教授）

